

# 同時代史を考える

田 端 宏

千歳市史編さん委員会会長

『新千歳市史通史編上巻』が刊行されて五年余が過ぎ、同下巻の準備が具体的に進行しています。叙述すべき年代は上巻のあとをうけて太平洋戦争の敗戦、復興の年代から現代までを予定しています。いわゆる同時代史を書くことになりま

す。同時代史は現在の人々が生きて来た時代そのもの、あるいはそれに近い過去についてまとめられるものです。現代史といわれる歴史叙述と思ってもよいのですが、執筆する人々が生活への密着感のある表現に惹かれてと思われませんが、同時代史と表記した著作等も多くみられます。

三宅雪嶺が大正時代に執筆、発表しはじめて戦後の昭和二十年（雪嶺の没年でもあった）まで書いていたものをまとめて出版した全六巻三二〇〇頁余の大著が『同時代史』でした。第一巻を「万延元年より明治十年迄」と表題し、以下第六巻の昭和二十年まで一年ごとの叙述を連ねています。雪嶺の生没年は万延元年から昭和二十年だったので、執筆者本人の生涯と全く重ね合わせた文字通りの同時代史が書かれたわけです。この『同時代史』は、雪嶺主宰の雑誌『我観』の「同時代観」欄に二〇〇回以上連載したものをまとめたもので、刊行する時に『同時代史』との表題にすることは雪嶺本人の意思だったとされ、昭和二十四年〜二十九年に岩波書店から出版された時の書名は『同時代史』になっていました。『同時代史』は「同時代観」——自分が生きてきた時代をどう見るかをまとめたもの——というところで「大躍進の時代」という見方や「知識が愈々進みて思想の自由之に伴

はず」という時代観が書かれているのです。

『日本同時代史』全六巻（歴史学研究会編集 青木書店一九九〇〜九一年）と名付ける同時代史もあります。この書は東西対立、冷戦構造の変化のなかで日本も高度成長期を経て政治、経済、文化などあらゆる面で大きく変わり「戦後民主主義の空洞化」が言われるようになった時代を戦後の転換期ととらえ戦後の日本史を見直そうという意識で編集されています。各巻は1敗戦と占領、2占領政策の転換と講和、3五五年体制と安保闘争、4高度成長の時代、5転換期の世界と日本、というテーマのもとに各巻七〜八名の執筆者が担当して「国際的連帯・世界的視野、民衆の主體的側面、戦争と平和の問題、経済至上主義批判、マイノリティ（少数派）問題を重視する」見方で戦後史を見直そうとしていたのです。

同時代史もいろいろな見方で書かれるのは当然で、千歳市民の考える同時代観、同時代史が『新千歳市史 通史編下巻』に叙述されることになりました。地域固有の問題意識がどんな歴史的経過を踏んできたのか、それを歴史の鑑（かがみ）として生かすことができるかを考えなければならぬと思います。例えば空港の増便、発着時間帯の拡大を考える時、経済活動、観光利便性などの面と騒音問題の面との調整という課題など、多くの人々が関心を持ち、意見を持つてきた事柄の具体的な推移は、そのまま地域の歴史の一面です。その問題処理の経過も歴史の鑑の性格をも持ちあわせるものです。

鑑はお手本という意味ですが、次のように言われることもあります。「歴史の教えるところこそまさに人民や政府がかつて歴史から何も学ばなかったということ」があらわれている、というのです（ヘーゲル『歴史哲学』）。歴史の教訓を生かすということが実際には出来ていないのだと考えるのです。それは、過去の経験を参考にするだけではなく、その時々状態にあった方途、あるいはそれを導く理念が必要であるという考え方のようです。やはり歴史の鑑、特に同時代的な歴史の鑑を生かす考え方は重要なのだと思います。